

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	スウェーデン	
学校名	浜松湖南高等学校	氏名	藤田 優希	学年	3年

1. 留学概要

期 間：2025/08/05~2025/08/22 (約3週間)

渡航先：スウェーデン・ストックホルム

受入先：Önskeförskolan (就学前学校)

2. 探究テーマ

問 い：多様性を認め尊重できる人材を静岡県で育成するために必要な教育と考え方とは？

経 緯：私の地元である静岡県で多様性を実現したい！

考え方や価値観の基盤が築かれる幼児期の教育を変えることが効果的だと考える。

インクルーシブ教育の先進国であるスウェーデンの就学前学校で活動すると決める。

3. 活動内容

<探究>下記の3つの活動を中心に両国(日本・スウェーデン)において探究をした。

・実習 日本：NPO法人むく(児童発達支援事業・放課後等デイサービス)

スウェーデン：Önskeförskolan(就学前学校)

NPO法人むくでのボランティア経験があったため、障害やLGBTQなど様々な特徴を持つ人々同士が共生できる社会に興味を持ち始めた。そのため、探究テーマを多様性に決めたきっかけとなった施設で再び活動することで、日本の現状を再確認してから留学することにした。施設では、1人1人に合わせたサポートをし、その子の「できる」を増やすことを重視していた。

就学前学校では、平日の9:00~15:00(約6時間)先生のサポートをしながら、子どもたちと過ごした。インクルーシブ教育とは、障害の有無や人種・性別によって分け隔てることなく共に過ごし共に学び合う教育のことを指す。基本的には全ての子どもが共に過ごしていたが、室内遊びなどの時間には、サポートが必要な子は少人数のクラスに集め、個々に応じた対応をしていた。常に全員が共に過ごすのがインクルーシブ教育だと思ってしまっていたのだが、必要に応じて個々に応じた対応やサポートをすることも大切だと実感した。日本でも支援学級を設け対応していたりするため、スウェーデンと同じ形ではなくてもインクルーシブ教育は日本でも行われているのではないかと気づいた。

・街頭インタビュー

日本では静岡県の遊園地「浜名湖パルパル」(30名)で、スウェーデンでは公園や駅前の広場(20名)で街頭インタビューを行った。円滑にインタビューを行える、かつインタビューの結果が見える化する方法を考えた結果、質問と回答の選択肢が書いてあるスケッチブックにシールを貼ってもらう形で行うことにした。そのため最悪の場合、言葉を交わさなくてもインタビューが完結してしまい、現地の人意見を生の声で聞けなくなってしまう。



そのため、不審者ではないと分かってもらうためにも、スウェーデン語で話しかけてインタビューへの協力をお願いし、インタビュー自体は英語で行った。話しかけても「Nej(No)」と断られてしまうことが多く、心が折れて話しかけるのが怖くなってしまうこともあったが、「どのくらい滞在するの?」「日本行ってみたいんだよね」と話しかけてくれたり、「多様性に興味があるのいいね!」と言ってくれたりした人のおかげで頑張ることができた。「インクルーシブ教育について知っていますか。」という質問に対して、「知っている又は聞いたことがある」と答えた人がスウェーデンでは20/20だったのに対して日本では13/30だった。インクルーシブ教育は多様性を実現するために有効的だと思うが、街頭インタビューから分かったように日本において認知度が低いのが課題である。そのため、ポスターやSNSを活用することによって認知度を上げ、インクルーシブ教育の良さを知ってもらいたい。

・先生へのアンケート

卒園した幼稚園やNPO法人むく・就学前学校の先生にアンケートに答えてもらった。スウェーデンでは、「金曜日までに回答して欲しいです」と置き手紙をして用紙を置いておいたのだが、目にとまらなかったのか、後回しにされてしまったのか、あまり答えてくれなかった。直接お願いしたりして工夫すれば良かったと後悔している。発達障害を持つ子どもと普段から関わっている人は、その子に応じた対応を大切にする傾向があり、インクルーシブ教育を行うべきだと思わない人が多かったが、大半の人は行うべきだと考えているようだった。医療的ケアが必要なだけでその他は問題なく行える子どもには向いているかも知れないが、知的な遅れがある子どもは周りについていけない可能性があるため、体制を整えたり、本人や家族の意見を尊重したりすることが大切だと考えた。

<アンバサダー活動>



ホストファミリーと浜松餃子作り！
皮から作ったので大変だったが、なんとかできた
<その他>



折り紙でくす玉や鶴・紙飛行機を作った！
作って〜とリクエスト！ちょい人気者に！

上記の探究活動以外にも、ホストファミリーから沢山の話を聞くことでスウェーデン人の考え方などを知ることができ多くの学びを得ることができた。

医療的ケア児を受け入れられる環境が整っていない教育施設が多いため、学校への付き添いが必要だったり、保育園や幼稚園への入園を断られてしまったりすることがある。そのことから、その家族の負担も大きくなってしまっているという現状があるため、私が教育施設（幼稚園や学校など）において医療的ケア児のサポートをする学校看護師となり地域に貢献したい！